

創立7周年記念研究報告会：小田原城天守の構造を考える  
～小田原城天守模型調査の中間報告～ 2020年2月11日



白根工務店代表 白根伸浩 伝統木構造の会理事

白根棟梁は熊谷で14代続く大工の家柄です。現在の棟梁は伝統木構造を基本にした住宅建築がメインですが時には社寺も手掛けます。講演では今まで手掛けてきた建築の事例を紹介しながら、山を見て木を見て建築する、木組みの面白さを伝えていただきました。

白根棟梁の建築は伝統木構造を手掛ける大工でも、どう組んだら出来るのか簡単には理解できないほどユニークなものばかりです。今回の宮本氏の発表にもあるように小田原城天守は他の城と違うユニークな構造部分もあるとの話でしたが、いつの時代にも白根棟梁のような人がいて、伝統を踏まえながら新しい革新的な工法を生み出す人が出てくるのだらうと思いました。



辻村農園・山林代表 辻村百樹 みんなでお城をつくる会理事

当家の所有山林は元々小田原藩有林であり、現在も江戸時代に植林された樹齢200年～300年の大杉が100本程現存しています。

お城は殿様が、自藩の為・領民の為・そして自らの為に築城したものですから、現代においても、その中心の天守は、小田原市民が主役の立場で、地元の英知と資材を総動員して創るのが筋ではないでしょうか。乱暴に言えば、国の指針や観光対応というものは、あくまで従の関係だと、私は考えます。

日本は古来、石を土台に木と紙で建築物を作ってきた国。燃えるけれどもそれで一旦無に戻り、残った土台の上に再建を繰り返して来ました。そうして経済が廻って来たのだと思います。

その循環は経済だけではなく、森林再生、職人技の伝承、技術の進化をもたらしました。また、木にも伐り時、使い時があります。充実期を逃さずに使えば数百年単位の寿命を持つ建築が可能で、そこに令和の時代の技術が融合すれば、未来へと伝承する新たな伝説の誕生です。

天守の森と呼ばれる当家の山に入り、一緒に「どの木でお城を創ろうか」と選木するのが地元の醍醐味ではないでしょうか。

事務所移転のお知らせ

2020年4月より、事務所移転いたします。移転に伴い、電話番号は廃止となりますのでご連絡については、メールまたは、FAXにてお願いいたします。なお、メールアドレスとFAX番号の変更はございません。今後とも、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

新事務所連絡先：

〒250-0042 神奈川県小田原市荻窪 4385

Mail: info@odawara-oshiro.org Fax: 050-3488-2039



小田原城天守事始め～木造天守への道～ 第5/6回コラム発信

小田原城天守調査研究室 宮本 啓

第5回 宝永度再建の小田原城天守の史料について②

今回は『小田原城天守模型等調査研究報告書』などをもとに各史料についてご紹介するとお伝えしていましたが、現存史料の概要についてももう少し補足します。おおまかなアウトラインを把握戴くことで、今後の理解を深めて戴ければと思っています。

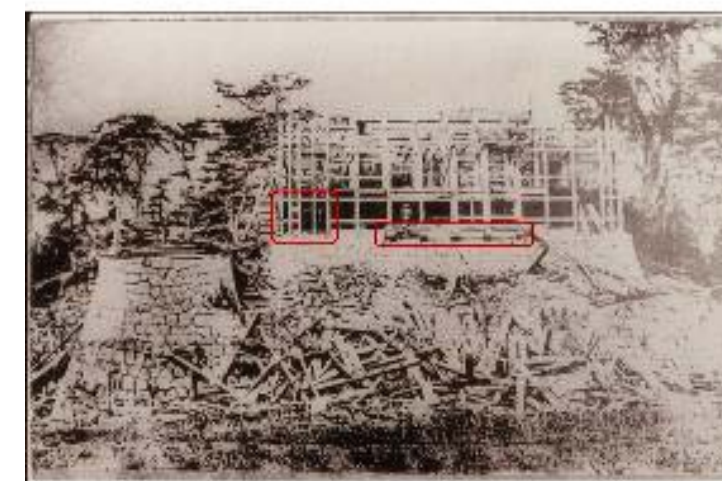


「東大模型」

「東大模型」と明治3年(1870)天守解体時の写真

現在の天守閣最上階に展示されている「東大模型」は、『小田原城天守模型等調査研究報告書』(以下、『報告書』と略します。)によれば、最後の木造天守との関係は希薄で「別の文脈」で作られたものだと言われています。しかし、藤岡博士が昭和35年(1960)再建の復元設計の際に参考にされたことは明確な事実であり、今後も再検証が必要です。

藤岡博士が「東大模型」を参考にされた理由のひとつとして、明治3年に天守が解体された際の写真が根拠となっています。不鮮明ではありますが、現在の本丸広場からかなり目線の高いアングルで撮影されたものです。赤く囲った箇所、1階端部の柱の配置の仕方と「張り出し」部分の柱の数が「東大模型」に類似しているのです。



解体時写真

以上、前回を含めた天守のみに関する現存史料(文献除く)のアウトラインを纏めますと…

- 3基の天守雛形が現存する。(「大久保神社模型」「東大模型」「東博模型」)
- 「小田原城三重天守引図」という図面の、藤岡博士による複写がある。(原図は不明)
- 明治解体時の写真が残る。

という内容です。今後も参照するかと思います、ご記憶に留めて戴ければ幸いです。  
次回からは、『報告書』の調査結果などをもとに、これまで挙げました史料についてさらに詳しくご紹介していきたいと思ひます。お楽しみに。

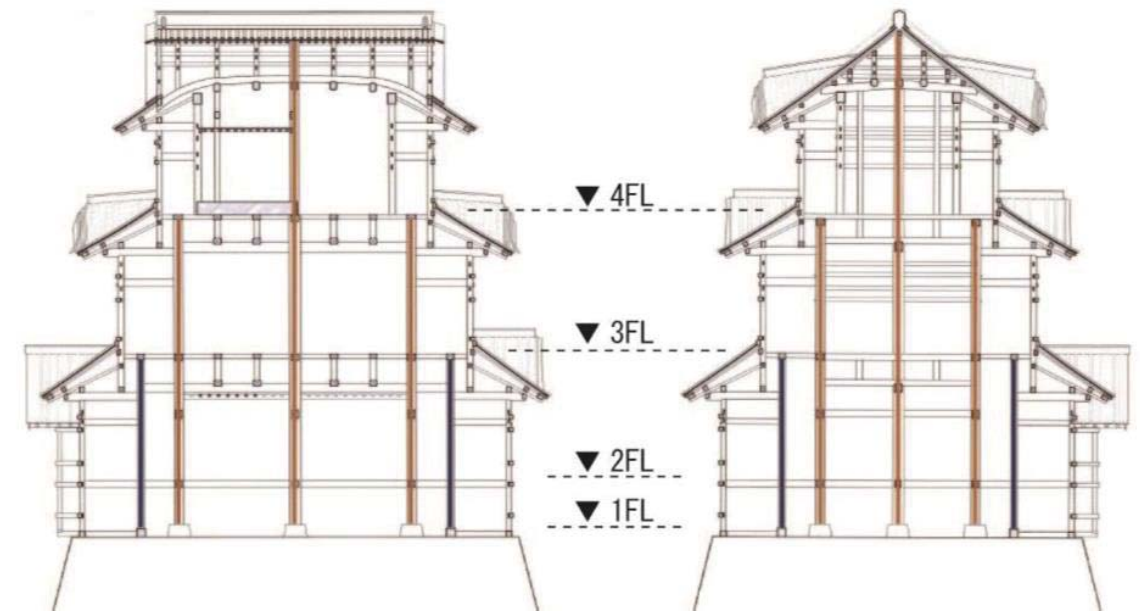
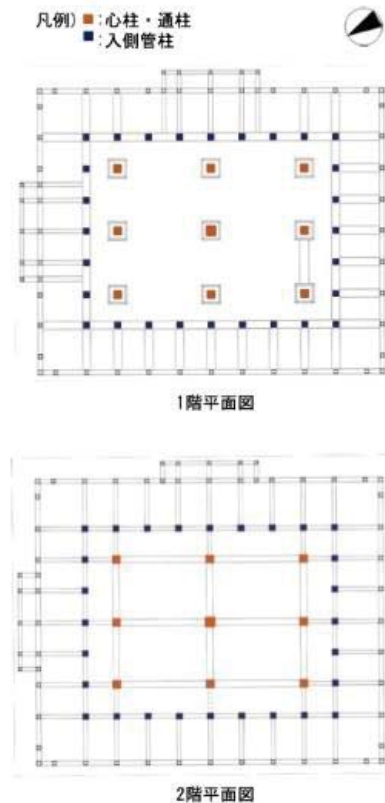
東大模型 写真：『小田原城天守模型等調査研究報告書』  
天守解体時の写真：小田原城天守閣提供  
※個々の写真・図版の SNS 等への転載はご遠慮ください。

## 第6回 模型と引図にみる軸部\*構造の特徴①

第4、5回で、文献を除く天守に関する現存史料のアウトラインを見てきました。今回からは『報告書』を参照しつつ、著者の修士論文「宝永度小田原城天守の軸組架構方法の研究」から天守の軸部構造の特徴をかいつまんでご紹介していきたいと思ひます。

### 「東博模型」の軸部について

神奈川大学名誉教授の故・西和夫先生を中心としてまとめられた『報告書』は、「東博模型」を「確実に存在した天守」として位置付けています。再検証は必要ですが、まずはその指摘に従って「東博模型」の軸部を見ていきましょう。下図は『報告書』記載の図面を著者が加工したもので、オレンジと青で2種類の「通柱」を区別しています。



「東博模型」断面図

オレンジの柱は、中央の心柱と「身舎(もや)」と呼ばれる主要な内部空間を囲う通柱です。青の柱は3階まで延びる通柱ですが、「入側(いりがわ)」と呼ばれる武者走りを含む空間を構成し、特に小田原城天守では特徴的な柱であるため、修論では「入側管柱」と呼び区別しています。「管柱(くだばしら)」とは、「1層」部分のみに建つ柱のようですが、今回は「1重目」までの柱という意味で「管柱」としました。

天守は必ずしも通柱を使用するとは限りません。彦根城天守のように管柱だけで造られた事例もあります。なぜ小田原城天守が数種類の通柱を使って計画されたのかはまだ明確にできませんが、どのような内部空間であったのか、どのようにすれば早く丈夫な天守が造れるのか、といった「計画」と「施工」両方の要素が考えられます。

次回からは、ひとまずどのような構造であったのか、その可能性を模型と引図(第4回参照)をもとに探していきたいと思ひます。お楽しみに。

\*軸部…ここでは、柱や梁、桁などの主要な構造部材をさします。

写真・図版はすべて『小田原城天守模型等調査研究報告書』より  
※個々の写真・図版の SNS 等への転載はご遠慮ください。